



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

上海日本人学校浦東校における中国語・日本語スピーチ大会の実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 栄樹 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173878

上海日本人学校浦東校における中国語・日本語スピーチ大会の実践

前上海日本人学校浦東校 教諭

滋賀県甲賀市立甲賀中学校 教諭 西村 栄樹

キーワード：内容の重視、国際理解、伝統行事、引き継ぎ、グローバル人材の育成

1. はじめに

上海日本人学校は、1975年2月に上海補習学校として誕生し、2016年に創立30周年を迎えた、伝統のある在外教育施設である。また浦東校は、急激な児童生徒の増加に伴い、新校舎として黄浦江の東側に建てられ、2015年に創立10周年を迎えた。幸運にも、それぞれの節目の年に赴任でき、伝統を重んじながら日本人学校としての特色や上海という地で子どもたちに何を伝えていくべきかを考える貴重な経験をした。中でも、20回の節目を迎えた「中学生中国語・日本語スピーチ大会」（以下、中日スピーチ大会と略す）は、領事館や運営委員会などの後援もあり年々完成度の高い行事となっているように感じる。さらに日本人学校という枠を超え、流暢な日本語を話す現地の学校の生徒から受ける刺激も強く、その後の人生にも影響を与える大会の一つであったと考える。本報告は、赴任2年目に大会の運営に携わって感じたことや今後の展望を中心にまとめたものとする。

2. 中日スピーチ大会の概要と工夫した点

(1) 大会概要

本大会は1997年に日中国交正常化25周年を記念して開始され、中学部が浦東校に移ってからも途切れることなく続いている歴史ある大会である。中国の中学生は日本語でスピーチを行い、日本の中学生は中国語でスピーチを行う独自の大会で、お互いに相手の国の言葉を使ってスピーチを行う。例年、中学生が様々なテーマや切り口で、母語とは違う言語で考え方を発表する。



中日スピーチ大会当日の様子

- 目的 : ① 上海日本人学校中学部生と上海現地校中学生との交流を通して、日中友好の一助とすると共に、広く国際理解を深める機会とする。
- ② 日本語、中国語でのスピーチを通じて、相互の語学力向上を図る。

○ 発表時間 : 1人3分以内

○ 近年の参加校：上海中学国際部、上海市甘泉外国語中学、上海外国語大学附属外国語学校

○ テーマ : 友好親善、同世代に訴えたいこと、未来への展望に関する内容

*過去の例「形のないつながり（言葉を通して分かること）」、「国際性とは（真の国際人とは）」

「幸せな日本のカラス！（日本での奇跡体験）」、「私の日本語勉強法（ドラマを通して）」

「私の勇気（中国の友人に対する思い）」、「おもしろい中国語教師（テレビからの中国語学習法）」

(2) 大会までの流れ

- < 5月 > ・校内の企画会議・職員会議にて1次案提案 ・出場者募集（ポスターを各クラスで貼る）
- < 6月 > ・候補者集計 ・中学部会提案（発表者選考会について） ・候補者ミーティング
- < 7月 > ・発表者選考会 ・発表者決定 ・選考会結果発表&発表者ミーティング
- < 夏休み中 > ・現地校への出場依頼文書作成 ・発送依頼
- < 8月 > ・添削指導の進捗確認 ・発表者への連絡（今後の流れ）
- < 9月 > ・日文原稿データ提出締切り ・日文原稿最終チェック

- ・発表者ミーティング（中国語講師の先生へ指導依頼）
- ・9月企画会議・職員会にて2次案提出　・校長・領事館・運営委員会へ原稿依頼
- <10月>
 - ・大会パンフレット表紙デザイン募集　・中文原稿データ提出締切り
 - ・発表者ミーティング（発表練習の計画配付）　・日文・中文原稿に訂正が無い最終チェック
 - ・現地校からの中文・日文の到着確認　・校長・領事館・運営委員会からの原稿確認
 - ・全ての大会パンフレット原稿を揃える　・大会パンフレット表紙決定　→ 昇降口に掲示
- <11月>
 - ・パンフレットを業者へ依頼 仮刷り（3日ほど）→本刷り（2週間ほど）
 - ・発表者練習開始（昼休み：担当・中国語講師で分担 朝練：担当で）
 - ・各係の仕事開始　・担当者打ち合わせ（体育館にて当日の流れ確認）　・スライド準備
 - ・生徒会担当と打ち合わせ（当日の流れ確認）　・音楽科の先生と合唱の打ち合わせ
 - ・来賓確認　・「当日の流れ」プリント作成　→ 中学部全職員・管理職・教務に配付
 - ・教務・事務（通訳）と大会当日の流れを打ち合わせ（前々日）
 - ・前日準備　・管理職・教務と体育館で動きの確認（前日準備後）
 - ・大会当日（トランシーバーでの指示、スライド操作、現地校生徒誘導）
 - ・反省記録配付（データ入力の依頼）
 - ・反省記録集約（各クラス・発表者・取材者）→中学部・企画会議で連絡

(3) 大会運営に向けて工夫した点

毎週1コマの中国語の授業があり、習熟度に応じてクラス分け（S～Fクラス）も行われている。大半の生徒が中国に来てから中国語を学んでいるが、上達の速い生徒は学んで2年程度でHSK（中国政府認定資格）の最高級（6級）にも合格する実力を持つ。中日スピーチ大会に出場する生徒は校内では10名程度（各学年3～4名程度）で、出場希望をする生徒の多くは、例年、流暢に話すことができるSクラスやAクラスに在籍する生徒が多い。

しかし、発表選考会では、表現力や語学力だけでなく、中国で実際に体験したことや「日中の架け橋」役として未来に向けた思いなどの主張したい内容を重視するようにした。また、大会当日の発表者だけでなく、聴衆側にも高い意識を持たせ、学校全体でこの大会にむけて日中友好について考えを深められるように、年度の開始の段階から道徳や総合の時間を活用して、国際理解をテーマにした授業や作文指導を行った。

その他にも、小中併設校の特色を生かし、小学6年生を大会当日に招待して行事の枠を広げたこと、発表者の顔写真をパンフレットに掲載したり、募集した大会用ポスターを発表者用のスライドにも使用したりしたことなども新しい試みであった。またマルチタイム（MT）を利用して発表者が各学級に挨拶回りをしたことも、事前の雰囲気づくりとして一定の効果があったと考える。

3. 大会の反省からさらに進化したこと

(1) 大会後のアンケートや振り返りより

第20回大会終了後にとった生徒用アンケートや職員の振り返り用紙からは、大会の賛否両論、様々な声が寄せられた。その一部を紹介する。

①日本人学校生徒アンケート

- 現地校生の発表に本当に感動した。日本語がとても上手で、たくさん練習してきたことが分かった。日本を好きでいてくれることを嬉しく思った。
- 中国語や日本語が上手な人というよりも、「他国に興味をもって交流をする勇気がある人」が国際性豊かな人間だと感じた。
- 作文を書くところと、中文に訳すことに苦勞した。自分が伝えたいことが言葉にできず、文を覚えるのが

遅くなってしまった。もっと早くに覚えていれば、表現力を磨くことに時間をさけた。(発表者)

②現地校生徒アンケート

- この大会が私に大きなチャンスくれた。スピーチをする力が上がって、交流をする力も、自信を持つ力もあがった。日本人と友達になることもできた。自分に不足していることも分かった。チャンスに感謝したい。
- 舞台の後ろで準備をしていた時、最初少し緊張したが、日本人学校の先生が話しかけてくれてだんだんリラックスできるようになった。日本人学校の生徒の皆さんも、廊下で出会うと元気に「おはよう」と声をかけてくれ、披露してくれた合唱もとても素晴らしかった。
- もっと両校の交流を増やしたいと思った。中国の学生は日本の学校生活に興味をもっているし、中国の学校は外国人を歓迎していると思うので、ぜひうちの学校も見学してほしい。

③職員の振り返り

- 以前問題点とされていた男子の発表者や、非ネイティブ(家庭環境含め)生徒の参加が達成できたことは非常に良い。行事をどう捉えるかという教員の理解や意識の向上が必要と感じた。
- 小6が参観したのはよかった。小学部の児童が中学部に上がる見通しにもなり、中学生としての手本も見せるいい機会になった。
- 中日スピーチに向けて、発表者だけでなく、その他の生徒もこの行事に関わっているという意識をもたせたい。そのために、委員会へ仕事依頼、広報活動(校内掲示、放送など)、教科・領域などでの取り扱いなどを検討していく。
- 原稿の推敲にあたり過激な内容にならないように配慮はしたが、中国人の微妙な感情までは感じ取れなかった点は反省。国語科でOKになった内容が、中国語講師からNGになるということになってしまった。あらかじめ中国語講師の確認を取るなど失礼のない原稿になるようなチェック体制が必要。
- これだけ大きい行事であるなら、もっと生徒を巻き込めればと思う。学校内のみのスピーチ発表や、少なくとも会場準備や記念品の介添えなど、生徒にもできることが沢山あると感じる。

(2) 第21回大会(次年度)に生かしたこと

多くの反省をもとに、より進化した行事となるように第21回大会に向けて準備や話し合いが新たに進められた。私自身が赴任3年目に入るということもあり、年度が変わる前に上に書いたような反省も踏まえて新担当者に引き継ぎを行った。これらの結果、翌年11月の第21回大会で大きく改善されたことがある。例えば、

- 玄関前に発表者のコメントを2週間前から貼り出した。
- 小学部の6年生の教室に中学生が広報部隊を派遣し、大会の素晴らしさを伝えた。
- 原稿作りから発表者の選考、現地校への周知・募集、冊子作り等々、これまで教師が行っていた役割も多くの生徒がかかわるようにさせた。
- 浦東新区内での中国語作文大会に応募し当選するなど、行事の幅が広がられた。



正面玄関に飾られた発表者のコメント

こういった行事を皆で作ろうとする姿勢や日中友好への熱い思いが、赴任3年目により進化した形となって表れたことがとても嬉しく感じた。日本人学校の中で伝統行事をいかに引き継ぐかがとても重要なことだと思う。

4. むすびに変えて

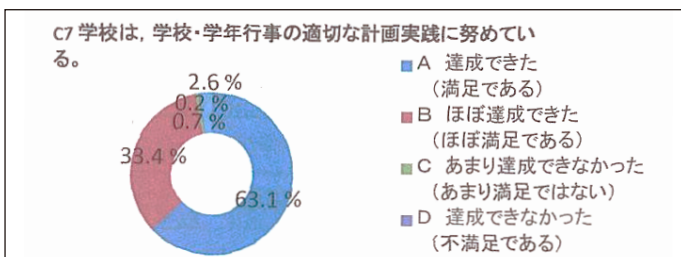
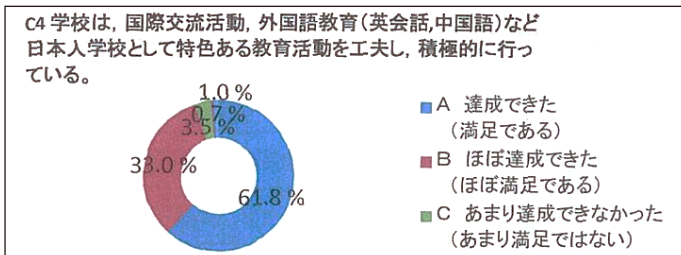
(1) 保護者アンケートより

右の資料は日本人学校に在籍する保護者に毎年行っているアンケート調査の中の項目である。

「C4 学校は国際交流活動、外国語教育(英会話、中国語)など日本人学校として特色ある教育活動を工夫し、積極的に行っている」という質問に対し、「満足できた」が6割、「ほぼ満足できた」が3割と、合計9割以上の保護者からプラス傾向の回答を示した。

C7も同様で、充実した学校生活を送る上で、中日スピーチ大会のような学校行事を成功させるためには、学校行事の役割は大きいと考える。特に、上海日本人学校浦東校は、世界

で唯一の小中高併設の学校であり、多くの学校行事を滞りなく適切に実践することが重要である。今後も積み重ねてきた伝統を大切にしながら、各校種・各発達段階に合わせた行事の適切な計画実践が求められる。



(2) グローバル人材の育成に向けて

外国語を勉強することは、単に語学能力の向上に留まらず、その言葉の背後にある異なった文化やものの考え方を学ぶことにも繋がり、ひいては自分の思考能力や視野を拡げてくれるものと考えます。特に日本人学校の生徒は、海外にいるということで外国語や文化に触れる機会が多く、将来にわたってグローバルに活躍したいと考える生徒が多かった。中日スピーチ大会はほんの小さな大会に過ぎないが、上海で両国の中学生が意見交流を図る貴重な場であったと捉えている。日ごろの学習の成果を発表したり、それを見聞きしたりする経験の積み重ねは、グローバルな人材育成に大きく役立つものと思う。

これからの世界は、より世界中の人々が協力し、知恵と力を出し合って解決しなければならない問題が山積している。このことに積極的に協力して取り組むことができる人材を育てていかなければならない。互いの言葉を遣って、豊かに表現することは相互理解のみならず、互いの伝統・文化を学び尊重することにつながるものと信じている。これからも同世代の者が自分の考えや夢を発表し、聞き合うことを通してお互いの友情を深め、世界のさらなる発展の担い手として活躍する人材育成に努めていきたい。